

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(5)

海外の博物館・美術館・公文書館等における保存状況

調査委員会

「日本写真保存センター」調査委員会では、平成19年度のフランス（パリ）およびアメリカ（ワシントンDC）の調査活動に続き、平成20年度はイギリス（ブラッドフォード）とオランダ（ロッテルダム）、アメリカ（ロチェスター）とカナダ（オタワ）の写真保存機関で、写真原板がどのように収集保存され、利活用されているかについて調査を行った。

イギリスとオランダには平成20年8月24日～31日に、高橋則英（日本大学芸術学部教授）と早川与志子（明治大学大学院講師）が、アメリカとカナダには8月31日～9月7日に、吉田成（東京工芸大学芸術学部教授）と山口孝子（東京都写真美術館保存科学専門員）が調査に伺った。

## 写真・映画・テレビからニューメディアを集める 国立メディア博物館

(National Media Museum, Bradford)

高橋則英（日本大学芸術学部教授）

調査に伺ったイギリスの国立メディア博物館では、コレクション部長のPaul Goodman氏と、コレクション・アクセスキュレーターのBrian Liddy氏にインタビューした。

国立メディア博物館の前身は、1983年に設立された国立の写真・映画・テレビ博物館（National Museum of Photography, Film and Television）である。メディア博物館はロンドンの科学博物館やヨークの国立鉄道博物館を擁する国立科学・産業博物館グループに所属し、ロンドンから北に約280km離れたブラッドフォード市にある。2006年11月より現在の名称となったが、改装された施設は前面がガラス張りの7階建てビルで、写真、映画、テレビの常設展示室と2つの企画展示室、IMAXシアターを含む3つの映写室などがあり、年間70万人以上の入館者がある。収蔵品は写真、映画、テレビの各部門のほか、TVゲームな

どのニューメディアも含め多岐にわたっているが、科学博物館の一部門ということで、テクノロジーの観点から機材のコレクションが中心となっているのが特徴である。

写真部門についても、カメラを中心とした機材のコレクションが非常に充実しているが、歴史的に貴重な写真作品も数多く収蔵されている。フォックス・タルボットの初期のオリジナルネガやプリントを含む6,000点のコレクション、コダック社が寄贈した20万点の写真や1万点の機材のコレクション、デイリー・ヘラルド社が1910～1960年代に撮影した300万点のニュース写真のネガとプリントを含むコレクションなどがある。また世界最古の写真協会として知られる王立写真協会が収集した27万点の写真、6,000点の機材、13,000冊の書籍を含む歴史的なコレクションも2003年に収蔵され、写真コレクション全体の資料総数は350万点に上る。

これら資料のデジタル化については、現在までに350万点の資料のうち約1%がデジタル化されているだけであるが、今後5年間のうちに5%のデジタル化を目指しているという。データは科学博物館、鉄道博物館と共同で開発したアイベースと名付けられたデータベースに入力され、インターネットでの公開も計画されている。

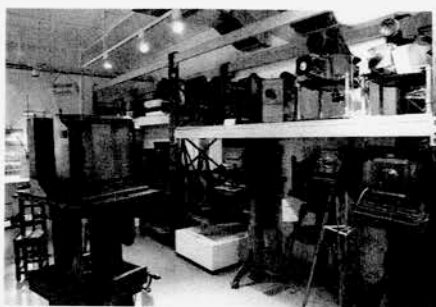
博物館の運営は、政府予算、特別基金、収益事業、スポンサーなどからの寄付で賄われているが、80～90%の運営費は政府からの補助である。科学博物館グループは政府の文化・メディア・スポーツ省の所管であるが、グループ全体で政府から2,800万ポンド（約40億円）の予算が計上され、そのうち350万ポンド程度がメディア博物館に充てられている。

メディア博物館では教育と研究に力が注がれており、訪問した日も引率された児童のグループを数多く眼にした。

タルボットのカロタイプ



国立メディア博物館の正面



歴史的カメラの収蔵庫





デイリー・ヘラルド社の撮影ネガ台帳



テレビジョンの変遷を展示



写真展示室

税金で運営される国立の博物館ということで入館が無料であることも好ましいことである。専門的には外部の大学や研究機関とも連携し、資料の調査研究などへの活用を図っている。館内のリサーチセンターでの調査研究については基本的に誰でも利用可能であり、特別な紹介状なども必要としないということである。商業目的の使用など限られた場合のみ費用を徴収することになっているが、研究や教育などの目的による調査や出版などへの利用は基本的に無料である。

イギリスでは1970年代に写真の博物館を設立する構想が生まれ、科学博物館とヴィクトリア&アルバート美術館がその担当の候補となり、最終的に科学博物館の一部門として国立写真・映画・テレビ博物館が誕生した。芸術作品としての写真は多くの美術館、博物館が収集するところであるが、それとともに写真や他のメディアをサイエンスとして捉え国立の博物館を設立するというのが、イギリス国民の写真に対する高い見識を伺うことができた。

### 写真家のアイデアから誕生したミュージアム ネーデルランド・フォトミュージアム (Nederlands Fotomuseum, Rotterdam)

2003年にロッテルダム市に設立され、2007年にマース川に臨むラスパルマス・ビルに移って、新たな施設で活動を始めたネーデルランド・フォトミュージアムは、オランダの写真家の原板をコレクションし、展示するユニークな機関である。その母体となったのは、オランダの写真家たちのアイデアを基にして1980年に設立された国立写真アーカイブである。現在までにエド・ヴァン・デル・エルスケンらをはじめとする129人の写真家の作品と原板がアーカイブに収集されている。20世紀の物故写真家が主で、その

10%程度はアマチュア写真家という。収蔵件数は資料も含め合計で400万点あり、そのうちの350万点がネガとポジフィルムなどの原板であり、これらを3℃あるいは14℃などの低温収蔵庫で保管している。

収集する対象は物故写真家あるいは制作活動から退いた写真家で、購入によるものもあるが、アーカイブの主要なものはミュージアムと写真家あるいは著作権継承者との契約によって収集されている。原板からニュープリントを作成して外部へ提供することも行っているが、これらを含めコレクションの活用は、写真家の作品が使用されるたびにミュージアムに著作権料を支払うという形で行われている。著作権料は基本的にはミュージアムと写真家が50%ずつの比率で分け合い、例年平均して15万ユーロの著作権料が発生しているという。ミュージアムの運営予算は年間約300万ユーロであるが、そのうち政府からの補助金が80%、ロッテルダム市の補助金が15%、館の収益事業が5%という割合になっている。

デジタル化については、現在までに400万点のコレクションのうち約10%程度がデジタル化されデータベースを構築している。データベースはウェブサイトと連携して作成されており、限定的なデータについては外部からの検索・参照が行える。

ネーデルランド・フォトミュージアムは写真家の原板を収集・活用するという、世界でも例のないユニークなミュージアムで、日本写真保存センターの目指すモデルとなりそうな機関でもあるといえよう。前記の国立写真アーカイブのほか、国立写真センター、国立写真修復アトリエが統合されて設立されたものであるが、このうち1975年に設立された写真修復アトリエでは、写真家のネガフィルムをより安定なPETベースのフィルムにデュープする事



寄贈されたネガフィルム



写真展示室



デジタル化は4×5カメラで



戦争博物館と大砲の展示



寄贈を受けたアルバム



整理されたプリントファイル

業を行っていた（現在は休止しているが）。ヨーロッパの一小国ともいべきオランダで、早くから国家が写真の重要性を認識し、収集や保存に力を入れていたことに感慨を深くした次第である。

ネーデルランド・フォトミュージアムでは、展覧会部長のFrits Gierstberg氏と作品リサーチコーディネーターのMartijn van den Broek氏に話を伺った。

### 戦争に係わる写真と映像の博物館 英国王立戦争博物館 (Imperial War Museum)

早川与志子（明治大学大学院講師）

ロンドンの英国王立戦争博物館の写真アーカイブ部門のキュレーター、David Parry氏を訪ねた。

この戦争博物館は、英国に関わった戦争を記録するために1917年、第一次世界大戦の最中に設立された。博物館から数分の距離にある写真アーカイブの主な目的は、英国に帰属する近代の戦争・紛争に関する写真のコレクション収蔵で、軍事・社会・家族史・メディア研究・戦争写真・大英帝国、英連邦などの研究者に対する情報提供及び歴史写真のコレクターへの指導などである。その範囲は、2つの世界大戦を含む20世紀全般、21世紀はイラク、アフガンまで、さらに19世紀後半のクリミア戦争、アメリカの南北戦争など国際的規模で幅広く集められたコレクションは15,000件もあり、総計1,000万点の映像のうち約4割がカラーである。

地下の保管庫には、写真や資料がカード、ファイル、ボックス、スクラップブックなどに年代、国、地域、戦争などの項目毎に分類されて保存されており、すべてに照合番号が付され、大変わかりやすい。これらの情報はデータベースに記録されている。また、デジタル化の作業は専任の担当者5～6人と写真家9人で行われており、これまでに4万点作業が済んでいる。現在は、第一次と第二次世界大戦のデジタル化プロジェクトが国家予算で進められているとのことである。

博物館は国家が運営しているところから、人的、経済的な面で大変恵まれていることは確かだ。また、「戦争」という国家の大事業の広報宣伝の道具である側面も否めない。しかし、その機能に関しては、情報・資料収集の質的

量的充実、整理・保存・管理のシステム化の確立など参考にすべき点が多かった。特に利活用については、貸し出しの方針や規則などが明確で、著作権上の問題がない写真のon line collectionもあり、誰でもアクセスできるし、閲覧室も一般に広く開放され、利用しやすい仕組みになっている。

### 世界に先駆けて設立された写真の殿堂 ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館 (International Museum of Photography and Film at George Eastman House)

吉田 成（東京工芸大学芸術学部教授）

米国ニューヨーク州ロチェスター市にあるジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館（以下GEHと言う）のGrant B. Romer氏、Wataru Okada（岡田洋）氏とJoe R. Struble氏から写真の利活用の現状について伺った。

GEHの本館はイーストマン・コダック社の創始者ジョージ・イーストマンの邸宅であったが、氏の遺言によりロチェスター大学に寄贈され、後に同大学とコダック社との協力によって、1947年に写真博物館として生まれかわった。写真術の誕生から現代に至るカメラや写真作品のコレクションは世界トップクラスの規模を誇っており、写真の歴史研究、写真芸術研究に関心を持つ人々の研究拠点となっている。総敷地面積は約40,500平方メートルあり、スタッフ数は常勤と非常勤の合計約125人である。

### 米国における美術館・博物館

米国の美術館・博物館等の設置形態については、国の成り立ちや税制、社会的背景、習慣等が日本と大きく異なっていることに留意しなければならない。

通常、米国では美術館・博物館を含めた非利益団体は、それぞれ特定の目的と指針を掲げて発足し、運営されていて、各々の非利益団体がチャーター（Charter）と呼ばれる公共奉仕の誓約書のようなものを提示し、それに基づいて社会に貢献している。

多くの美術館・博物館の運営は、寄付金などの基金を運用するところから得られる収入に依存している。基金そのものは美術館の運営には直接使用しないで、銀行や委託投資サービス等に預けてその運用益を運営に充てている。公的な補助金は限られているので、市民や一般企業からの寄

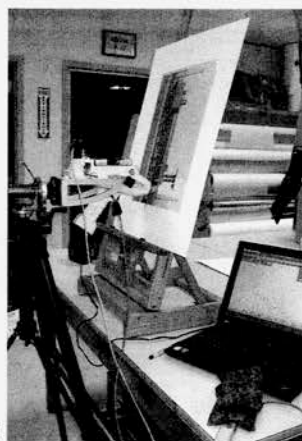




ジョージ・イーストマン・ハウス本館



ホールプレートのダゲレオタイプ



歴史的作品の技法分析装置

付金や入館料、出版、ブックストアー、カフェテリアの売上益、ワークショップの授業料、巡回展のレンタル料等の収入によって運営されている。GEHでは館内で3つの学校を運営し、スタッフが授業をすることによる授業料収入もその一部となっている。

近年、多くの美術館・博物館では、コレクション・マネージャー（所蔵品管理部長）という部署が設けられ、その美術館の特性に合ったコレクション・マネジメント・ポリシーを策定し、常日頃からスタッフの教育と注意義務を徹底し、利活用に際しての自制規範とその励行を徹底させている。GEHではコレクション・マネージャーは館長直属で、6つの学芸部門の中間に位置付けられ、所蔵品管理と利活用の要としての機能を果たしている。

### コレクションの収集・保存とコピーライト

一般に美術館では、作品収集のほとんどが寄贈によるもので、購入は僅かなパーセンテージである。GEHは写真美術館としての名が知られているため、様々な立場の人たちから作品寄贈の申し出がある。申し出に対し通常、各部門のアシスタント・キュレーターが、収集担当者としての機能を果たしている。収集にあたっては美術館の収集計画や、収集方針を理解してその任に当たっている。収集委員会は3カ月に1度召集され、キュレーターが候補作品を提案し、収集の賛否を問うて決定される。

ちなみに米国では、作品の寄贈者が保存や管理のための資金的な援助も合わせて行っているケースも少なくない。

原則として作品の収集段階で、作家自身あるいはその遺族から著作権使用許諾の契約書を取り交わしている。著作権者や相続人が複数の場合には、それぞれから同意の署名を貰っておくという念の入りようである。作家から直接、

寄贈を受ける場合には、著作権使用許諾も必ず確保することになっている。

### 目録作成とデータベース

GEHにおける作品の登録（Entry Record）は、ワードのテンプレートで行っている。部門を代表する収集担当者がワードのテンプレートに入力して、収集初期段階での詳細な情報を所蔵品管理部に送信する仕組みになっている。これは入力されたデータの正確さを所蔵品管理部でダブルチェックすることで、データの信頼性の確保に努めている。またGEHでは作品が納入された際に、仮の資料番号が付けられる。複数の部門から作品や資料が入って来るので、所蔵品管理部において統一した通し番号を付け、その番号が後々の資料番号となることが多い。なお、収蔵が決定されるまでの手続きに時間がかかる場合もあるので、途中の段階で仮の受取証（レシート）を作成して、寄贈者やギャラリーなどに送付している。こうした契約文書によって、譲渡が完全に成立した段階ではじめて、データベースにその収集作品の登録記録が入力される。

最近になって既成のデータベース・ソフトが美術館向けに開発され販売されるようになったが、未だに不十分な点や改良の余地が多く、大きな美術館や博物館では既製品ソフトを購入して独自の改良を施している。しかし、資金的に余裕の無い中小の美術館では、なかなか新しいソフトへの切り替えや改良を思うように進めることができず、美術館同士のネットワークを利用した連携の体制が未だに充実していない。GEHでは基本的にデータベースは館内のス

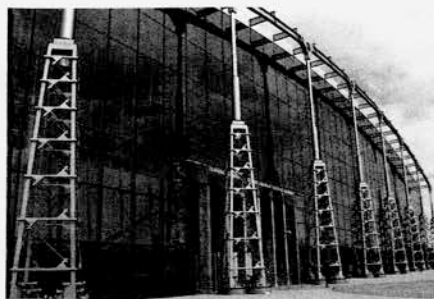


修復作業室



さまざまな技法の写真展示

写真撮影：  
P23-25 高橋則英  
P26-27 吉田 成



LACのガラス張りのモダンな建物



肖像写真の保存



強制劣化を試験する恒温恒湿器

トップ専用で、一般公開はしていない。またホームページを利用した所蔵品の公開も限定されている。カタログが充実した部分に関しては、E-Museumを通して外部から見たり検索したりすることができる。

### 所蔵品の利活用

所蔵品の利活用について、美術館はデジタル・データを作成する費用を利用者に請求し、収入としている。また、データの使用後は、それを破棄する契約を事前に結んでおくことで、不法な再販を防いでいる。画像の利用を依頼してくるクライアントは、原則として、作品個々の著作権所有者に直接連絡を取って利用許諾を得て貰う。利用許諾のないものに対しては、美術館は画像を提供しないことになっている。今後の課題として、コレクション・マネジメントの方向としては、所蔵品そのものの管理と、所蔵品から複製されたデジタル・データ（ファイル）の管理を統一しようとしている。これは所蔵品のオリジナル（作品）と複製されたデジタル・データとが同等の価値を持つてくる可能性があると考えられているためである。また、作品をTシャツやエプロン、マグカップ等へ複製するなどの商品化については、作家とその歴史的功績への配慮から許可しない場合が多いことなど、利活用に当たっての許諾範囲が厳格に規定されている。

## 1850年代以降の写真を2,130万点も保存する カナダ国立図書館公文書館保存センター (Library and Archives Canada Preservation Centre)

山口孝子（東京都写真美術館保存科学専門員）

国立公文書館は1872年、国立図書館は1953年に設立されていたが、2004年にカナダについての知識を総合的に提供すべく、国立公文書館と国立図書館を統合して1つの機関となった。

カナダ国立図書館公文書館保存センターでは、カナダの400年の歴史と社会全般を反映する全ての資料を収集するため、書簡、図面といった紙資料のほかに、絵画、写真、フィルム、録音資料、機械可読記録などあらゆる媒体の「記録」を保存している。

写真は1850年代以降の2,130万点以上の画像情報が、映

像に関しては1897年からドキュメンタリー、無声映画、白黒やカラー「トーキー」などを総合して71,000時間以上の短編、長編フィルムが保存されている。

調査に訪れたカナダ国立図書館公文書館保存センターはケベックにある。1997年、総工費8,900万カナダドル（1カナダドル＝76円）、4年間で費やして建設された。害虫予防や防埃のために、建材をコンクリート、鉄、ステンレス、ガラスに限定している。さらに、災害を避けるため、設備関係（電力、水道、空調等）は別棟に設けている。建物面積は32,000m<sup>2</sup>、3階建ての収蔵庫のほか、4階に設備関係、5階に紙資料・書籍修復、画像・音声修復やデジタル画像処理などの研究室がある。収蔵庫は48室あり、収蔵資料に合わせた温湿度の管理がされている。

デジタル画像処理部門では、フラットベッドスキャナー、フィルムスキャナー、デジタルカメラを使用してデジタルデータ化を進めている。Rawデータを1台のサーバーに磁気テープで蓄積し、請求に応じてTIFFフォーマットに変換して納める。2007年度は20名のスタッフがマイクロフィルムから800万枚、写真から25万枚のデジタル処理を行った。

利活用における研究の裾野を広げる新たな試みとして、研究施設等に現物資料を移送し、閲覧・研究するプロジェクトを立ち上げている。担当者は作品管理部門と協議を重ね、保存上問題のない資料を選択して推進していくという。

写真部門の試作的プロジェクトとして、ネガフィルムから2万枚の画像データをオンライン上に載せ、効果的なフィードバックを得る準備をしている。情報提供を受け取る目的として、イヌイット（カナダの先住民エスキモー）に関する25,000枚の写真の画像データを載せた先例がある。

当初の運営予算は、政府の100%の支出であったが、現在では他機関からのデータベースのアクセス利用料金や、それに相当する資材提供を受けるなど多様化してきている。また、寄贈の際に寄付金をいただき、その資料の保存やデータベースの構築費用に充てるという方法もとっている。

また、このセンターは、カナダの動産的文化財に対して最適な保存修復方法を検討し、保存処理や保存科学、保存技術の実践的な研究を行う機関であるカナダ保存研究所（Canadian Conservation Institute, Ottawa）と協力関係にもある。